

井澗裕<sup>1</sup>

## ウラジミロフカから豊原へ

### －ユジノ-サハリンスク(旧豊原)における初期市街地の形成過程とその性格－

#### はじめに

ユジノ-サハリンスク(Южно-Сахалинск)は、日本とロシアにとって大きな歴史的意味をもつ街である。この街は 19 世紀の末に成立した帝政ロシア時代の開拓集落ウラジミロフカ(Владимировка)を母胎としている。20 世紀初頭には豊原と名を変え、日本の植民地「樺太」の中央政庁(樺太庁)を擁する都市に成長した。さらに、第二次世界大戦後にはロシア人の手によってユジノ-サハリンスクとなり、現在はサハリン州の州都としてロシア極東地域社会の拠点都市の一つとなっている。つまり、日本とロシアが交互に手を加えて発展した都市であり、そこには、それぞれの時代における両者の地域経営や都市計画的な視点・思惑の違いを見て取ることができよう。ゆえに、この都市の成り立ちと変貌の過程は、とくに近代における日ロ関係史を考える上で無視できない側面である。のみならず、日本の植民地研究の一環としてもこの街には重要な意味がある。豊原は、日本における南部サハリン経営の策源地として計画的に建設された都市であるからだ。ゆえに、後述するモーリス＝スズキのように、その計画理念や立地選定や市街地の基本構造ばかりでなく、市街地そのものに日本の帝国主義な支配と抑圧の構図を見る研究者も存在する。

また、こうした2つの視角は、現代の日本におけるサハリン史研究に対する2つの潮流をそのまま示している。第一の潮流はオーソドックスな、通史を志向するサハリン史である。すなわち、太古から現代への時間的変遷の中で、先史時代への考古学的なアプローチ、先住民族と日本・モンゴル・中国・ロシアなど周辺地域における諸民族との関係、近世以降の日ロ関係、サハリンにおける近現代史などの研究活動を進めるもので、いわば通時的な歴史研究である。第二の潮流は、特にいわゆる日本期(1905-45 年)に焦点をあてたもののうち、それを近代日本(帝国主義)の植民地研究の一環としてとらえるものであり、日本の植民地としての実態を明らかにしつつ、他地域の植民地研究との比較考察を踏まえ、その中に「樺太」をいかに組み入れていくかを重要な命題としている。これは近代日本の共時性を重視した研究といいかえることができよう。近年ではむしろ、比較的若手の学究に後者を志向する傾向が強い。こうした背景には 90 年代以降サハリンに関する研究環境が急速に改善していることがあげられ、注目すべき研究成果もいくつか存在する。とはいうものの、こうした研究成果があくまでも個別分野のものにとどまり、学際的連関性や通時的視野での相対化に欠けることは明らかであり問題とすべきであろう。とりわけ急務といえるのは、いかなる形にせよ、とかく離散傾向を示しがちなサハリンの歴史研究成果の取

<sup>1</sup> スラブ研究センターCOE非常勤研究員・博士(工学)

りまとめを図ることである。しかしながら、従来の日ロ関係史を基軸とする通時的研究と近年の植民地研究の一部をなす共時的な研究の間には、とくに深刻な概念的対立こそ存在しないものの、その認識や視座には若干の懸隔があり、歴史研究の進捗・集積・総合化を図る上でいささか厄介な断層を形成しつつあるように思われる。

さて、本稿のテーマは、ウラジミロフカから豊原市街地成立までの事情と、初期における豊原市街地の基本構造である。とりわけ「なぜ豊原だったのか」という疑問を重視した。この疑問に1つの答えを出すことで、都市としての豊原がどういう成り立ちを持っていたのかを明らかにし、今後の都市史的研究に対して基本的な視座を構築することができる考えたためである。この問いには2つの意味があり、すなわち「なぜ樺太庁をウラジミロフカ＝豊原に置いたのか」という疑問と、「なぜ豊原と名付けたのか」という疑問である。本稿は後者の疑問に応えることで前者の疑問を解決しようという試みでもある。それは、通時性と共時性という2つの研究動向を踏まえつつ、その断層面と言うべき1905年前後に焦点を当て、共時的な意味での課題である豊原市街地の成立事情に対し、通時的な研究アプローチを試みることで今後の研究動向の示準をなそうという目論見も含んでいる。

なお、本稿は2004年7月29・30日に行われたスラブ研究センター連続セミナー第5回「アジアの中のロシア／ロシアの中のアジア」研究会において「ユジノ・サハリンスク——その都市史的予備考察——」として発表した内容を加筆修正して成立したものであることを付記しておく。

## 1 ウラジミロフカ以前

本稿が「なぜ豊原だったのか」という問いに起因している以上、「豊原」という地名の語源について言及しないわけにはいくまい。言うまでもなく豊原とは「豊かな平原」というほどの意味であり、日本の地名としてはありふれた印象があるものの、新しい農業移住地域の拠点として、ある種の願望を含んだものであったと考えられる地名である。しかしながら、他の地名を見ていくと、たとえば、真岡(Холмск)は「マウカ」、野田(Чехов)は「ノダサン」、大泊(Корсаков)は「ポロアントマリ」(大きな港の意)というように、どちらかと言えば、先住民族が用いていた地名を翻字するか、その意味を和訳したものが多い。豊原の場合は、明らかにそれとは異なるが、その正確な由来は当時から不明であったようだ。『樺太の地名』によれば、「安政中の唐太日記」を典拠として「ヲロトコイ」が豊原であるとし、その原義を「奥の荒野又は奥の窪地」と解題している<sup>2</sup>。ただ、その論拠は必ずしも明らかではない。また、葛西猛千代は『樺太土人研究』の中で「豊原／パーセヘ／此地も元アイヌ部落にして明治八年樺太千島交換以来露人漸次南下移住してウラジミロカ(マ)と

<sup>2</sup> 葛西猛千代・西鶴定嘉・菱沼右一『樺太の地名(復刻)』(第一書房、1982年、原本は樺太郷土会発行、1930年)、pp. 132-134

改称せしものなり アイヌ語パーセへの意義不明調査中」と記している<sup>3</sup>。松浦武(竹)四郎の『竹四郎廻浦日記』によれば、「ハアセ／止宿所に宿す。此处平地樹木多し。只款冬と虎杖の鬱葱たる傍を刈り取りて小屋二ヶ所と三角屋一ヶ所を建たり。此三角屋へ入て宿す。今日の道凡六里と思わる。然し土人は七里と云ぬ」としている<sup>4</sup>。この「ハアセ」または「パーセへ」だが、田村将人によると、「あえて解釈すれば *paase-h* で<重い・もの>というほどの意味を持つか」という<sup>5</sup>。管見する限りだが、この「ハアセ」についてもウラジミロフカ=豊原の旧名称である確証はない。近年の研究成果には西村いわおの『南樺太 概要・地名解・史実』があり、「ハアセ・クシ(灌木の茂っているそこを通過するところ)」「開拓が進展し、豊かな原になるように」「豊後出身の樺太占領司令官原口兼済中将」など 8 通りの語源説を述べているが、やはり確証はないようである<sup>6</sup>。きりがないのでここで止めておくが、「ヲロトコイ」にせよ「パーセへ」にせよ、「トヨハラ」に近い音、ないしは「豊かな平原」という語義はウラジミロフカ以前の地名から見出すことはできない。少なくとも現段階では、ユジノーサハリンスクの起源をウラジミロフカ以前に求めることは難しいといえよう。

## 2 ウラジミロフカの起源

一方、開拓集落ウラジミロフカの起源は、当時の南部サハリン(コルサコフ)管区長官であったウラジミール Н. ヤンツェビッチ少佐(Владимир Наполеонович Янцевич)の名を冠したものであった<sup>7</sup>。ウラジミロフカに関してはコスタノフ(Костанов, А.И.)などの研究成果がある<sup>8</sup>。ここではこれを援用しつつ、ウラジミロフカの成立事情について簡単に見ておきたい。コスタノフによれば、1879年以降、義勇艦隊の蒸気船やシベリアからニコラエフスク経由で囚人が次々と送り込まれ、1882年までに島の人口は5,600名(先住民を含む)にまでふくれあがっていた。このうちの60%は囚人あるいは国外追放者であったが、サハリンにおける監獄の収容人員はわずか2,400名に過ぎなかった。これに加えて物資供給の問題がより深刻であり、これらの解決のために各地に開拓集落の建設が「卓絶した重要性を持つ課題」としてすすめられた。ウラジミロフカはこの時に開かれたサハリンで最も早いコ

<sup>3</sup> 葛西猛千代『樺太土人研究資料』(私家版・出版年不詳)、p. 153 右

<sup>4</sup> 松浦武(竹)四郎・高倉新一郎解題『竹四郎廻浦日記(上)』(北海道出版企画センター、1978年)、p. 592

<sup>5</sup> 千葉大学大学院社会文化科学研究科の田村将人氏から教示をえた。

<sup>6</sup> 西村いわお『南樺太 概要・地名解・史実』(高速出版、1994年)、pp. 172-173

<sup>7</sup> С. Гальцев-Безюк. Топонимический словарь Сахалинской области. Южно-Сахалинск, 1992. с. 163 なお、後述する А.И. Костанов の研究によれば、このウラジミル・ヤンツェビッチはポーランドの貧しい貴族の末裔で、カトリック教徒であったという。

<sup>8</sup> А. И. Костанов. Владимировка -- селение на черной речке из истории Южно-Сахалинска. Краеведческий бюллетень. 1993. № 4, Южно-Сахалинск. с. 26-55

コミュニティの1つだという<sup>9</sup>。

ウラジミロフカの開基年については一般には1881年とされているが、コスタノフ論文では、1882年8月6日開基というユジノ-サハリンスク教育大学(当時)教授ブラ斯拉ベツ(Враславец, К. М.)の説を一部修正し、1882年9月ころと見るべきだとされている<sup>10</sup>。

1885年夏にはサハリンにおいてガルナーク大佐(Гарнак, А. Л.)の調査隊がサハリンで活動し、報告書を残している。彼らは「ススヤ・ナイバの将来の居住適地と西海岸への適切な連絡路」を調査し、「いくつかの居住地はこの地を全く知らないがゆえに生まれた代物だが、少しでもいい印象を抱けたのは唯一ウラジミロフカであった」と報告している<sup>11</sup>。ガルナーク大佐は「ウラジミロフカ村は2年間存在したが、南サハリンで唯一、若干整備され、よくつくられた家々ができあがっている」と評価している<sup>12</sup>。さらに彼は「ススヤ川流域の悪い状況は道路がなかったためである」とし、コルサコフ～ナイブチ間に直線状に点在する集落群は単なる踏み分け道でつながっており、「ウラジミロフカまでの道は確かに存在したが、馬が通るのは難しく、主として冬に橇で移動することに使われていた」とも記している<sup>13</sup>。これらの報告書は、開基当初のウラジミロフカが街道の要衝でも西海岸への分岐点でもなかったことも示唆している。1887年にコルサコフとナイブチを結ぶ街道が開通し、ススヤ平野における開拓集落の形成の起爆剤となるが、ウラジミロフカはこれよりも早く、形成が促されたことは確かであろう。

とはいうものの、このウラジミロフカについて最も具体的で、かつよく知られた情報は、やはりチェーホフ(Чехов, А. П.)の『サハリン島』の一節であろう。彼が訪れた1890年において、ウラジミロフカの人口は46戸91名、うち女性が36名であった。この一節でチェーホフは、ウラジミロフカは豊かな牧草地を抱えているものの、世帯を構成しうる女性の不在が健全な農村の発展を妨げていることを述べているのだが、ここで注目したいのは、*«Как сельскохозяйственная колония, это селение стоит обоих северных округов, взятых вместе»* つまり、「農業植民地としては、この村は北部の両管区を合わせたほどの価値をもっている」という部分である<sup>14</sup>。この『サハリン島』においてこうした表現で土地の肥沃さを強調している部分はほとんど見られない。少なくとも、チェーホフにとってのウラジミロフカは「豊かな牧畜農村」の可能性を感じさせる地であった。ちなみに、古写真でよく知られたウラジミロフカの教会(礼拝堂)は、1890年の聖母(生神女)庇護祭の日(露暦10月1日)に聖別式が行われており、チェーホフは式のために村を訪れた聖職者たちと雑魚寝

<sup>9</sup> Костанов. 1993. с.34

<sup>10</sup> コスタノフによれば、この説は公式に認められ、ユジノ-サハリンスク開基100年の式典はソビエトの命令で1982年9月に実施されたという。というものの、開基120年を祝う記念パレードは2001年7月に行われており、1881年説もいまだに一般的であるようだ。

<sup>11</sup> Костанов. 1993. с. 46

<sup>12</sup> Костанов. 1993. с. 47

<sup>13</sup> 同上

<sup>14</sup> А. П. Чехов. Остров Сахалин (из путевых записок). Южно-Сахалинск, 1995. с. 259 なお、訳文は中村融訳『サハリン島(上)』(岩波文庫、1953年)、p.277に拠った。

していたという<sup>15</sup>。

### 3 その後のウラジミロフカ

ところで、日本期に関する著作において豊原以前について述べる場合、古今を問わず、前記チャーホフの翻訳をもって説明に代える傾向が強い。とはいえ、これはどちらかと言えばウラジミロフカの黎明期であり、これが豊原と名を変えるまでには 15 年以上の歳月が存在することを無視することはできない。そこで「チャーホフ以後、日露戦争以前」のウラジミロフカの様子を概説しておきたい。

1892 年 11 月 1 日に正教会の僧侶ピョートル・ロハツキー(Петр Лохацкий)は、開拓者子弟のための学校をウラジミロフカに開いた。1897 年までにこの学校には 30 名の児童(男子 17 女子 13)が学んでいた<sup>16</sup>。また、この学校は 1900 年までに 2 クラス編成に拡充されていた<sup>17</sup>。また、コルサコフ地域病院の内科医であったスルミンスキー(Сурминский, В. А.)による 1893 年の衛生状況報告書によれば、ウラジミロフカには 46 戸の人口に対して 13 棟の浴場があったが、ノボーアレキサンドロフスク(Ново-Александровск)は 89 戸に対し 9 棟しかなく、ルゴヴォエ(Луговое)にいたっては 53 戸に対し 2 棟だけであった<sup>18</sup>。

さらに、ウラジミロフカには少なくとも複数の商店が存在していたようである。このうちで最大のものはタタル商人サドック・ガファーロフ(Садык Гафаров)のものであり、あらゆる商品は国内関税をかけられておらず、流通事情のよいウラジオストックよりも廉価で提供されていたという<sup>19</sup>。坂本泰助『樺太之豊原』の中にも、「…而してウラジミロフカ市街は北は草野西は軍川及び追分西南は並川南は大澤等の部落に圍繞され廣範なる鈴谷平野の中央都市として住民は市街続きに牧舎を建てて牧畜業の傍ら商業等にも従事する等鈴谷平野各部落の物資の集散は概ねウラジミロフカに依って行はれたのであると云ふ…(傍点筆者)」という一節がある<sup>20</sup>。また、次節で後述する岩田房次郎も、ウラジミロフカにあった商店 2 軒について言及している。これによると、一つは「官憲の物品販売の商店」で、「恰も本邦の僻陬なる土地の荒物屋の大なるもの」のようであり、占領当初は旅団司令部として、1906 年初頭には守備隊経理部員の宿舎および「当地高等文武官の倶楽部」として利用されていた。そして、この官営商店は「此村及近郊の土民は諸物品及諸食料迄も売下げられておったので貴重なる装飾品及家具鍋釜等の類に至るまで鬻ぎおったのである」としている<sup>21</sup>。もう一軒は民間の商店で「急峻なる斜面に建てられたる」二階建ての、「民家

<sup>15</sup> Костанов 1993. с. 48-49

<sup>16</sup> Костанов 1993. с. 49-50

<sup>17</sup> А. Т. Кузин. Южно-Сахалинск: с вершины века. Южно-Сахалинск, 1996. с. 22-24

<sup>18</sup> Костанов 1993. с. 50

<sup>19</sup> 同上

<sup>20</sup> 坂本泰助『樺太之豊原』(樺太著名町村史刊行会[私家版]、1922 年)、p. 24

<sup>21</sup> 岩田房次郎「南部樺太所見」(『建築雑誌』第 219 号、1906 年)、p. 52

中最近に建築された」もので、「規模も整然として」いたという<sup>22</sup>。

1897年に行われたロシア全域を対象とした最初の国勢調査によれば、ウラジミロフカには123名の居住者がおり、150以上の家やそのほかの建造物があったという<sup>23</sup>。同様に、『樺太及北沿海州』から、1899年末におけるコルサコフ州の集落一覧を見ていくと、ウラジミロフカの人口は56戸136名と微増しているだけだが、建物数が233棟と多いのが目立つ。これはダリ子一(143戸・326名・256棟)、ベレズニヤキ(90戸・238名・241棟)、ノウオ・アレキサンドロフスク(115戸・239名・239棟)に次いで多く、コルサコフ(74戸・263名・163棟)を大きく凌駕している<sup>24</sup>。ウラジミロフカ以外にも200棟以上の建物をもつ集落は存在するが、それらはいずれも200名以上の人口を抱えていたことがわかる。加えて、日露開戦後の1904年には予想された日本軍の侵攻に備えて野戦病院が建設され、日露戦争時にアニワ湾において撃沈されたロシア軍艦ノーヴィクの乗組員が収容された。またこの野戦病院は、後述する樺太守備隊兵営地の母胎となった。

以上の点から見て、ウラジミロフカには戸数や人口に比して建物数が多く、住宅以外の施設群が他の集落よりも充実していたことを裏付けている。こうした状況をまとめてコストノフは、「20世紀はじめにおいて、ウラジミロフカは大きくはないものの十分に力のある村の体裁をなしており、それはシベリア・極東にある幾千のロシアの村々とよく似ていた」と、ウラジミロフカを評価している<sup>25</sup>。

#### 4 日本人の見たウラジミロフカ

次に、日露戦争期のウラジミロフカが日本人の目からはどのように見えたのかを確認していく。まず、大江志乃夫『兵士たちの日露戦争』中で引用された、南部サハリン攻略作戦に参加した兵士新屋新宅の手紙には、「(7月8日にコルサコフを占領し)翌九日急進して追撃せしも軽装にて九里半ばかり進み、浦占る〔ウラジミロフカ〕という大村落の北端に至り始めて敵に会戦…浦占るは戸数僅かに三百内外なれど著名の地にて、昨年開戦以来新築したる大なる兵営二戸あり…(傍点筆者)」という一節がある<sup>26</sup>。「大村落」という曖昧な表現に解釈上の余地はある。しかしながら、ここでの「戸数」は戦時中ゆえに世帯数ではなく建物数であると見るべきだから、前出の233棟に日露戦争時に野戦病院などを増強したとなれば、「戸数僅かに三百内外」も誇張とは言えない。

同じくサハリン攻略作戦に参加し、その後は樺太民政署と樺太庁で建築技手を勤めた岩田房次郎は、『建築雑誌』(日本建築学会の機関誌)に「南部樺太所見」と題する報告文を寄

---

<sup>22</sup> 同上

<sup>23</sup> Костанов 1993. с. 50

<sup>24</sup> 東亞同文會編纂局編・鈴木陽之助校『樺太及北沿海州』(東亞同文會、1905年)、pp. 66-69

<sup>25</sup> Костанов 1993. с. 50

<sup>26</sup> 大江志乃夫『兵士たちの日露戦争 五〇〇通の軍事郵便から』(朝日選書、1988年)、p. 233

稿している。ここにも「ウラジミロフカはコルサコフに次ぐ南部樺太の枢区である故に諸般の設備又コルサコフと殆んど並立してある如く思考せらるゝされば露国の官有建物として官衙、病院、寺院、学校其外官営商店、僧侶の官舎、病院附職員の官舎等あり殊に倉庫も二三ある」としている<sup>27</sup>。同様に、「殊に当地(筆者注:ウラジミロフカ)は将来の枢府を以て擬すべき所で今後大に発展すべき地である夫れかあらぬか今や内地人の来り住む者多く旅人宿、雑貨店、小間物商、料理展等の開設するもの連日の如くである」という一節も見逃すべきではないだろう<sup>28</sup>。

また、長谷場純孝の『樺太紀行』の記述を見ると、「ウラジミロフカは、恰も北部に於るルイコフに類し、其の地形も、南部平原の中央に位し、コルサコフを以て内地の大阪とすれば、ウラジミロフカは京都に似たり。露国も南部内地の枢区として、其経営をコルサコフと同様にし、兵營、病院、監獄、学校等規模宏壯にして、殊に現今建築中の兵營の如きは、中々壮大なるものにして、此辺の村落が、兵火に罹らざりしは実に我軍に取りては大なる幸の事と謂ふべし…(傍点筆者)」とあり、「南部内地の枢区」あるいは「其経営をコルサコフと同様」という表現でウラジミロフカ市街地施設の充実ぶりを記している<sup>29</sup>。

最後に、樺太守備隊司令官山田保永陸軍少将による報告書「軍事上施設ニ関スル意見進達の件」(1906年4月14日付)には、「ウラジミロフカ」は露領時代ニ於テモ稍枢要ノ地ト見做サレタルモノト如シ即チ寺院ヲ建テ第二区殖民監督官ヲ駐在セシメ病院ヲ開設セル等ヲ以テ其一斑ヲ推知スヘシ而シテ帝国領樺太ノ為ニハ将来尤モ有望ノ市街ヲ建設シ得キ価値ヲ有ス」という一節がある<sup>30</sup>。樺太守備隊もまた、ウラジミロフカが枢要の地であったとの認識を持っていたわけである。

図1および写真1は実際のウラジミロフカの様子を示すものである。北方へ至る街道のためにチョールナヤ・レーチカ(「黒い川」の意。日本語では晴気川と呼ばれた)に架けられた橋を基点として南方に広がる線状集落がウラジミロフカであった。厳密な意味で言えば、街道の分岐点ではないことがわかる。また、周辺には広葉樹林と荒地が広がっていたこと、現在ウラジミロフカと通称される一帯はブリジネエという集落であり、また、ウラジミロフカ西方に位置するダリ子ーヤルゴヴォエと合わせて、ある程度連関する集落群を形成していたように見える。写真1からは現在でも北サハリンなどで見られる線状集落によく似た情景が見て取れるものの、率直に言えば、コルサコフと並ぶ南部の枢区にはとても見えない。私たちはこの写真にチェーホフの描写を重ねて投影することで、「豊原」につながるウラジミロフカの「真価」を見誤ってきたと言えるかもしれない。

しかしながら、これらの記述から判断する限り、チェーホフが訪れてより15年が経過

<sup>27</sup> 岩田、p. 50

<sup>28</sup> 岩田、p. 54

<sup>29</sup> 長谷場純孝『樺太紀行』(民友社、1907年)、pp. 305-306

<sup>30</sup> 「軍事上施設ニ関スル意見進達の件」(陸軍省『陸満密大日記』、満密受第179号、1906. 10. 2)、防衛庁防衛研究所図書館所蔵。なお、同報告書の内容は、陸軍省編『明治三十七八年戦役陸軍政史』第八巻(復刻版、湘南堂書店、1983年)、pp. 780-781にも記載されている。

した 1905 年のウラジミロフカには、教会堂や複数学級を持つ学校があり、近隣の物産が集まる商業地区もあった。おおよそ 250 棟ほどの建物が軒を並べ、それは貧しい山村出身の日本人兵士から「大村落」に見える程度には発達していた。チャーホフが惜嘆したような辺鄙な寒村の時は過ぎ去り、誰の目から見てもスサヤ平原部における枢要な農村としての役割が確立されていた、もしくは確立されつつあったと見なければならぬだろう。

## 5 断章 晴気村

次に、ウラジミロフカが豊原となるまでの変遷を簡単にたどりつつ、この時期における市街地構造について言及してみたい。日本軍がサハリン攻略に乗り出すのは、日露戦争の第二年目である 1905 年 7 月のことである。第 13 独立師団を北部と南部の二方面に分け、このうち南部方面部隊は 7 月 7 日に女麗(пос. Пригородное)に上陸、翌 8 日はコルサコフを占領した。コルサコフ官衙地はこの時に炎上している。内陸部に撤退したロシア軍は、11 日からウラジミロフカ西北のダリネエ(Дальнее)の森林地帯で頑強な防衛活動を行ったが、12 日には敗退し、南部戦線は日本軍による掃討段階に入った。ウラジミロフカ付近でも、前述した兵士新屋新宅が 9 日前後からウラジミロフカ北端付近ルゴヴォエでロシア軍の抵抗に遭ったと手紙に記している。翌年 9 月にこの地を訪れた柳田國男も「ルゴヴォエ迄の路は草深き野地なり。昨年の戦に露軍ここにて防御陣地を設けたる跡のこれり」としているから<sup>31</sup>、南部におけるロシアの防衛線はダリネエ〜ルゴヴォエのラインであったと見るべきだろう。それゆえに、ウラジミロフカの旧市街地は直接の兵火を免れることができた。

ところで、戦役時やその直後においては、新たな地名を占領軍(第 13 独立師団)の将校にちなんでつけた例が多々存在した。例えば、コルサコフを竹内、ガルキノウラスコエ(落合・Долинск)を太秦としたのだが、ウラジミロフカもその例に漏れず、晴気村と呼ばれた時期が存在した<sup>32</sup>。当時の新聞記事によれば、各地のロシア語による地名が難解であったため、一種の方便として命名されたとされているが、高級軍人の露骨な功名心を示唆するようなこのエピソードは、幸いなことに「地名の改称は勅許を経ざるべからず」という理由で取り消されたという<sup>33</sup>。実際には、占領直後に竹内少将の名で地名改称の申し出がなされた

<sup>31</sup> 柳田國男「樺太紀行」(『定本柳田國男集』第二卷、筑摩書房、1968 年)、p.449

<sup>32</sup> それぞれ竹内正策少将(歩兵第 25 旅団長)、太秦供康少佐(同連隊第 3 大隊長)、晴気市三少佐(歩兵第 49 連隊第 2 大隊長)に因んだもの。

<sup>33</sup> 小西海南「南樺太巡遊記(八)」『東京朝日新聞』、1905. 11. 17 によれば、「露国式の地名／由来樺太の地には土人の名けたる地名多しされど露国之之を改めたるもの或は其新に開拓したる箇所に呼称を下したるもの一層多きに居れり、此等は勿論露国式の名称にして本邦人には之を唱ふること頗る難く記憶に存し或は意味を解するは一層困難なり、我將卒の之に苦み為に軍隊の行動上尠からぬ障害ありしと云ふは決して無理ならず、この故に嚮に我軍は其必要に迫られて地名を改めたるもの多し、哥薩港を竹内、ウラジミロフカを晴気、ガルキノウラスコエを太秦と云ふが如きは其一例、然るに地名の改称は勅許を経ざるべからずとして其筋の内命により悉く之を取消したりとか、而して再び露式の呼唱を用ひつゝあり、其不便実



が、即座に「地図上記載ノ地名ヲ占領軍隊ニ於テ妄リニ改称スルヲ許可セサル」という陸軍次官からの素気ない回答がなされ、彼らの野望はもろくも崩れていた<sup>34</sup>。いささか余談ながら、このエピソードと類似した、占領軍軍人たちの「余禄」を戒めたと見られる通達は他にもある。1905年8月6日付の司令官宛の令達中に「占領地ニ於ケル軍衙ノ権力ハ占領中軍事上及地方人民ノ統括上必要ノ施設ヲ為スニ止マルヘキモノナルカ故ニ占領軍ニ於テ土地建物等ノ不動産ヲ人民ニ払下ケ又ハ長期ノ貸下ヲ為シ其他此等ノ不動産ニツキ諸種ノ永久的特権ヲ許可スルコトアラムカ占領ノ性質ト相容レサル結果ヲ生スルノミナラス将来該地方ノ経営上少ナカラサル支障ヲ来タス至ルヘキカ故ニ占領中ハ此等永久的ノ処分ヲ為ササルト共ニ特別ノ事情ニ依リ其必要アル場合ニハ理由ヲ具シ本大臣ノ承認ヲ受クヘシ(傍点筆者)」(第13師団長へ令達 満発第6795号)という一項があり<sup>35</sup>、とかく専横に走りがちな当時の占領軍の様子をうかがうことができよう。

## 6 ウラジミロフカ「遷都」

ともあれ、日露戦争の終結後、第13独立師団を母胎として樺太守備隊が編成され、旭川の第7師団隷下とされた。8月28日には樺太民政署が組織され、9月3日は本署をコルサコフに移し、ウラジミロフカには支署が設置された。そもそもサハリン攻略作戦は、ルーズベルト大統領の勧告を受け<sup>36</sup>、ロシア領を占領することで講和条約を有利に導くためのものであったから、サハリン島それ自体の領有を目的としていたわけではなく、ゆえに、国策的なレベルにおける経営方針があらかじめ定められているはずはなかった。当然の帰結として、守備隊司令部と民政署すなわち「現場」の判断によりなされたものであったと見るべきだろう。当時の民政署長官熊谷喜一郎も、新聞のインタビュー記事の中で「政府には相談しなかった」と証言している<sup>37</sup>。

後の樺太庁をウラジミロフカに設置することは、守備隊司令部や民政署の間では相当に早い時期から意見の一致を見ていたようである。また、この時の「遷都」論はいくつかの報告書で展開しているが、これらはすべて共通の文脈で構成されていることにも注目すべきであろう。これらの報告書はいずれも、中央政庁の位置をコルサコフとウラジミロフカの

---

に名状すべからず、余の如き忘健家に至りては之に苦しむこと極めて大、速やかに日本式の地名に改めたしと思ふもの決して余のみに非ざるべし」

<sup>34</sup> 『明治三七八年戦役陸軍政史』第八巻、p. 198 に、「八月七日 樺太地名改称方竹内少将ヨリ申出シ趣ヲ以テ参謀次長ヨリ本省ノ意見ヲ求メ来リシカ地図上記載ノ地名ヲ占領軍隊ニ於テ妄リニ改称スルヲ許可セサル意見ナルヲ以テ其旨次官ヨリ回答ス (満発第6806号)」と出ている。

<sup>35</sup> 『明治三七八年戦役陸軍政史』第八巻、pp. 191-192

<sup>36</sup> 松村正義『日露戦争と金子堅太郎—広報外交の研究』(新有堂、1987年)、p. 393

<sup>37</sup> 「お役所は土人小屋 三畳間の長官殿」『小樽新聞』1936. 8. 24 中に、「大泊の民政署を中央に移さうと調査した結果ウラジミルコフカ、豊原に設定政府にも相談せず庁舎、官舎市街地も区制等の移転準備をはじめ札幌を基範として近代都市の建設に着手した」とある。

二者択一にしている。その上で、コルサコフの欠点とウラジミロフカの利点を挙げ、「中央政府を置くべくの地」をウラジミロフカにすべきだとしている。理由も字句こそ違えど趣旨は同じであり、コルサコフは「土地丘陵多ク大ナル市街ヲ建設スルニ不利」で位置的にも「南海岸ニ偏スル」とし、ウラジミロフカは「農業上ニモ尤モ有望ナル平野部ノ中央部ニ位置」しており、「コルサコフ」「マウカ」「ドブキ」「リュトカ」に至る道路の集合点であること、「軍事上ヨリスルモ亦枢要ノ地」であるとしていた<sup>38</sup>。

こうした意見に基づきウラジミロフカへの「遷都」を公式に定めたのは、1906年1月31日から2月2日に実施された「市街地設計に関する決議」の席上であった。これは「樺太将来の行政を如何にするかという大会議」であり、その要旨は『日露戦役に依る占領地施政一件 樺太ノ部』に記されている。ここでは、中央政庁の所在地をウラジミロフカとし、コルサコフーウラジミロフカ間に鉄道を敷設すべきことが決議されている<sup>39</sup>。

この時に市街地として予定されたのは、「ウラジミロフカノ北端ヨリ同村ノ南方約千米附近(37.3 標高点)ニ至リ其東方一帯ノ地及現ウラジミロフカ西南方道路ノ西側幅五百米長千米ノ地」であった。さらに「旧露国病院を兵營敷地」とし、「官衙ノ位置ハ「ブリジネエ街道」分岐点ノ東方七百米附近」とすることも定められた<sup>40</sup>。新市街地の設定作業は雪解けを待って(おそらく5月ころより)始められ、この年はそれに費やされたと見られる。東西13丁南北14丁と称された新市街地がこうして姿を現した。

## 7 新旧市街地の関係

さて、具体的にはウラジミロフカのどのあたりに市街地を設けたのであろうか。いくつかの市街地図で確認する限り、新市街地の基点が、二本の街道の分岐点付近であったことはほぼ明らかである。事実、豊原市街(大字豊原)の条丁目の呼称はこの地点(大通と真岡通の交差点)を起点としているし、「旧露国病院付近を兵營敷地とする」という一項とも一致しているからである。「官衙ノ位置」についても東6~7条といった界限は官舎街であったことはわかっているため、前記と一致するとしてもよいだろう。ただ、官衙の要となるべき政庁の位置が若干ずれているのは検討を要するが、今後の課題としたい。

こうした新旧市街地の位置関係を非常に具体的に記述しているのが、前掲『樺太之豊原』である。「領有直後のウラジミロフカ」という項で豊原市街地との比較という形で旧市街地の状況を描写している。これによると、「現遠藤木工場の川向ひに一軒の製粉水車があり」「南は市街地の大通りより玉川橋を渡って左に曲がった辺から守備隊方面及西一条北三四丁目辺に点々露式家屋があり守備隊の煉瓦造り兵舎の所には元露式の広壮な建築物があ

<sup>38</sup> 前掲「樺太守備隊施設ニ関スル意見進達」(『明治三七八年戦役陸軍政史』第八巻、pp. 804-805)

<sup>39</sup> 鈴木陽之助ほか『日露戦役に依ル占領地施政一件 樺太ノ部』(復命報告書綴、外務省外交史料館所蔵)

<sup>40</sup> 『日露戦役に依ル占領地施政一件』、p. 20

り」「大通五丁目現郵便局裏通りより北は西一条学校附近南は停車通り辺に至る一帯は露人の墓地があり」「現王子製紙会社工場所在地一帯は混地の牧草畑及放牧地であり西方鈴谷川に面した所に穀菜畑があり」という状況であったらしい<sup>41</sup>。新市街地の界限も前記の墓地以外は「開闢斧鉞を加へざる樹木の密生していた箇所」であり、「東三条の辺より東方旭ヶ岡に至る方面は大森林地帯」であったという。これらの記述は基本的に前出図1に見られるウラジミロフカ集落の周辺状況を裏付けるものであるし、1906年9月15日にウラジミロフカを訪れた柳田國男の「ウラヂミロフカ、林地を区画して市街を設けんとす。林の中に露人の墓地あり。末は如何になるべきかと思ふ。此の村今は一筋の家つづきにて、露人の建てたる大なる家も少なからず。日本人の住みあふれたるものはテントをつくりて商をいとなむもあり」という記述とも一致している<sup>42</sup>。このロシア人墓地については、セールギー主教の旅行記などでも「計画的に区割りが進められている市街地の一角に、ロシア人が置き残していった墓地が見つかったが、棺は全て掘り返され、遺骨や遺体とともに焼き捨てられた…」と言及され<sup>43</sup>、ロシア側にも広く知られている。第二次世界大戦後の日ソ交替期においても、同様のことは主客を転倒して見られたが、これらは日ロ両国民が本質的に相手の文化に対する敬意や配慮に欠ける傾向にあった証左として記憶しておくべきだろう。

## 8 区画測設基準と市街地構造

この時に設定された市街地の区画構造は、明らかに北海道のそれを踏襲していた。より具体的にいうと、北海道の土地利用制度である大区画制が、ほぼそのままの形で導入されていた。その経緯については以前に言及したが<sup>44</sup>、ここで簡単にまとめておく必要がある。南サハリンの市街地における市街地区画の具体的な基準については、前掲『日露戦役二依ル占領地施政一件』の中に収められた「殖民地選定及区画施設規程」に見ることができる。これは文字通り、拓殖地の選定とその土地区画法について定めたもので、ここにある方300間という基本区画(中区画という)に基づいた土地制度は、北海道のそれを明らか

<sup>41</sup> 坂本泰助『樺太之豊原』(樺太著名町村史刊行会[私家版]、1922年)、pp. 23-24

<sup>42</sup> 柳田國男「樺太紀行」、pp. 443-463 なお、坪井英人「棄却されたものたち」(小森陽一・成田龍一編『日露戦争スタディーズ』、紀伊國屋書店、2004年)、pp. 172-192によれば、「講話調印と北緯五〇度線の国境画定前後に、志賀重昂、野口雨情、長与善郎、柳田國男らが樺太に」渡ったほか、岩野泡鳴などもこの時期に渡樺していることを指摘している。ここでは、後年の刊行であっても直接ウラジミロフカの市街地の情景に言及している柳田の一節のみを引用した。

<sup>43</sup> М. С. Высоков и др. *История Сахалинской области с древнейших времен до наших дней*. Южно-Сахалинск, 1995. с. 135 訳文は板橋政樹訳『サハリンの歴史』(日本ユーラシア協会北海道連合会、2000年)、p. 157に拠った。

<sup>44</sup> 詳細は拙稿『南サハリンにおける日本統治初期(1905-1915年)の建設活動と営繕組織』(修士論文、1997.3)と『日本期南サハリンにおける建設活動に関する研究』(学位論文、2000.3)を参照のこと。

に踏襲したものである。北海道の場合では中区画を6等分して1戸分の貸付地に行っているが、サハリンではこれが4等分になっているだけである<sup>45</sup>。この土地区画制度は佐藤昌介がアメリカにおいて研究し、帰朝後に北海道庁に献策したものである。1889年に新十津川の拓殖地区画に採用されて以降、北海道ではおしなべてこの制度により拓殖地の開発が行われた<sup>46</sup>。樺太民政署にこの制度をもたらしたのは、おそらく南鷹次郎であろう。彼は樺太民政署の農業政策顧問を委嘱されて渡樺しているが、ごく常識的に考えても、北海道の農業制度・政策を移植するための人選であることは疑いない。

拓殖の拠点となるべき市街地の設定基準については、第12条でふれられている。これも北海道とほぼ同じとあってよく、「市街地ハ一戸ノ間口六間奥行二十六間」で、「道幅十間裏通八間トシ方六十間トスヘシ」とあり、「市街地区域外ニ幅二十間ノ風致林ヲ」おくことも指示されている。実際の豊原市街地は方60間・街路10間中通8間を基本にした街区構成であったこと、また周辺部に林地が残っていたことがわかっており、この規格に忠実に測設されたことは疑いない。つまり豊原は、区画制度的な点においては、明治後期に北海道各地に建設された拠点市街地群の「兄弟」とみなすべきである。豊原市街地(大字豊原)の住所表記が札幌とは異なり、「東〇条南〇丁目」というように、北海道の地方都市と同一表記となっていたのは決して偶然ではない。実際に区画設定作業を担ったのは、民政署嘱託技師として「市街地設計ニ関スル決議」にも署名していた関山良助であった。彼は札幌農学校土木科の卒業生(第7期)であり、北海道の土地区画制度については学んでいただろうから、制度の委嘱が実行者によって歪められる可能性はかなり低かったと見てよいだろう。

## 9 初期豊原の点描

こうして整えられたグリッド上に新市街地が建設されたわけだが、ここでは官衙施設群を中心としてその経緯を時系列上で確認していく。豊原における最初の公共建設ラッシュは、1906年12月1日に開通したコルサコフ～ウラジミロフカ間の軍用軽便鉄道による格段に増強された輸送能力を駆使して1907年度から本格化した。交通の不便を補うために新市街地の建設には最初から鉄道の敷設が前提となっていた点は見逃せない。新市街地の官衙施設は、真岡通沿いに配された樺太守備隊施設群と、後の神社通を軸とした樺太庁施設群に大別される。このうち、樺太守備隊関連施設については、請け負った伊藤組が新築工事請負契約書9通など関連文書を保管しており、そのあらましを知ることができる。これによると、1940年11月30日に竣工した樺太守備隊司令部庁舎を皮切りに、翌年10月

<sup>45</sup> この事情について、後に南鷹次郎は<樺太は寒冷地なので、1戸あたりの牧草地が多く必要と考えた>という趣旨の発言をしている。

<sup>46</sup> 上田陽三『北海道農村地域における生活圏域の形成・構造・変動に関する研究』(学位論文、1991)などを参照。

30日には樺太守備隊司令官官舎、樺太守備隊衛戍病院が新築している。樺太庁の関連施設群については、1908年8月23日に樺太庁が正式に豊原に移転しており、この時までには庁舎は完成していたと見るべきであろう。なお、同日付で樺太地名改正令が公布され、ウラジミロフカは豊原と改称された。さらにこの後、1908年11月には初代の豊原郵便局も竣工し、「首都」豊原の陣容はひとまず整えられた。これらの公共建築は多くがスティックスタイルという建築様式を採用していたこと、これらの建築工事は陸軍技師田村鎮が主導し、旭川における第7師団建設工事で活躍した伊藤亀太郎と遠藤米七が、殆どの工事を請け負って活躍していたと見られることは、拙稿で指摘したとおりである<sup>47</sup>。スティックスタイルは木造下見板の外壁に装飾的なオーナメントを付加した様式で、旧札幌駅(北海道開拓の歴史村に復元保存)などに代表されるように、明治期北海道の公共建築についてもひろく一般的に見られるものである。比較的簡便な工法でありながら瀟洒な雰囲気醸成できるこのスタイルは、開拓の拠点として位置づけられた新興市街地にふさわしい景観を作り出していた。今ひとつ、様式という側面で注目しておくべきことは、日本期以前にサハリンで一般化していたロシア式建築をあえて踏襲せず、範を北海道に求めたことであろう。先述した陸軍技師田村は日露戦争中の1905年8月11日付で陸軍省雇員として樺太守備隊に派遣され、守備隊関連の建築工事の指揮とともに「将来建築スヘキ永久建築物」に関する調査を命ぜられている<sup>48</sup>。彼の書いた報告書そのものは残されていないものの、その後にかかれた守備隊司令官竹内少将の報告書には「永久建築ノ方法ハ…慎重ノ調査ヲ要スヘキコトナルカ露国ガ多年ノ研究ノ上採用シタル丸太積ミノ設計ニハ蓋シ本島ニ適セルモノト考フ」とあり<sup>49</sup>、当初ロシア式建築の評価は決して低いものではなかったことがわかる。しかしながら、実際にはロシア式建築は豊原にはほとんど採用されていない。現在のところ、その理由は推測によるしかないのだが、実際に工事にあつた建設業者の大部分が北海道からの渡航者たちであり、彼らはおしなべてロシア式建築の経験がなく、施工段階で生じる諸問題が解消できなかつたこと<sup>50</sup>、あるいは南鷹次郎が「農民家屋ノ構造ハ通シテ丸太式」で、「築造ニ便利ニシテ寒地ニ適スル」ものの、「其保存期限ノ短キハ欠点トスヘシ」と報告書で述べているように<sup>51</sup>、対応年数の短さを問題視した可能性があることなどが挙

<sup>47</sup> 詳細は拙稿「南サハリンにおける日本統治初期(1905-1915年)の建設活動と営繕組織」(北海道大学修士論文、1997)、「日本期南サハリンにおける建設活動に関する研究」(北海道大学学位論文、2000)などを参照のこと。

<sup>48</sup> 『明治三十七八年戦役陸軍政史』第六巻、pp.750-751

<sup>49</sup> 「兵舎建築に関する意見書」(守備隊司令官竹内正策による報告書、満密受第1627号、1905.7.20)、防衛庁防衛研究所図書館所蔵

<sup>50</sup> 実際に明治初期の北海道において開拓使がロシア式建築を試験的に用いたことがあるが、その後は利用されていない。北海道明治期の洋風建築に詳しい越野武は、「原因は校木間のコケ充填がうまくいかなかつたためと伝承されているが、この程度の些細な問題を克服するだけの強い需要がなかつた、というのに尽きるだろう」としている。越野武「アメリカ建築の移植」(『建築雑誌』第1384号、1996.2)、p.19

<sup>51</sup> 南鷹次郎「農事視察復命書」(前掲『日露戦役ニ依ル占領地施政一件』付第六号、1905.11.16)

げられる。また、単純にロシア風の景観と一線を画そうとしたという意図もあったであろう。ともあれ、こうした豊原における公共建築工事ラッシュが一段落するのは、1911年8月23日の樺太神社鎮座式によってである。従来のロシア的な農村であったウラジミロフカは「旧市街地」となり、その南側に明治期北海道の市街地を移植したような新市街地が並んでいたというのが、当時の豊原の姿であった。

この時点における豊原市街地は、この鎮座式の時に『北日本新聞』に掲載された略地図(図2)に見ることができる。これを見ると、樺太守備隊施設の周辺(大通北1~3丁目)に将兵を目当てにした旅館・貸座敷群が軒を並べていたことがわかる。豊原市街地は東三条通りを境にして官用地と民用地にはっきりと区画されていた。西一条・大通・東一条の3丁はほとんどが民用地として貸し下げられ、ここが新しい豊原経済の拠点となっていく一方で、真岡通には樺太守備隊司令部のほか衛戍病院や司令官官舎など関連施設が軒を並べ、官舎群のある一帯が「官舎街(かんしゃまち)」と称されたことも記事に載せられている。その官舎群を挟むようにして南5~6丁目に樺太庁の関連施設が建設されていた。これらは停車場通(後の神社通)と呼ばれる街路を軸として並んでいた。また、この図を見る際に注目すべきことは、市街地北部の街区間隔が広く、反対に南部を狭く描いていることである。記載事項はむしろ南部の方が多いにもかかわらず、こうした描き方をした背景には——むろん、断言はできないが——当時の市街地の中心が北部にあり、南部はまだ辺縁的意味合いが大きかったということがあるだろう。

写真2は伊藤組が所蔵していた古写真の1つで、建設途上の官舎街の様子である。撮影位置・方位・街区などから1908年の夏から秋頃、樺太守備隊司令官官舎の建設工事中に、同建物の建築工事足場上から南側を撮影したものであると推測される。手前に広がるのは、方60間の基本街区を4等分したものに官舎1棟を割り当てた非常に低密度な住宅街区である。官舎は官庁建築のスティックスタイルに呼応するように下見板の平家建木造建築で、脇便所あるいは物置と見られる別棟が附属している。また、写真の奥のほうには2戸1棟形式の官舎群が並んでおり、手前の官舎群との階級的相違を感じさせる。位置的な点から推測して、手前が守備隊の将校用官舎、奥の方が樺太庁の官舎群と推測される。さらに遠景に目をやると、官舎街の向こうにはまだ街区が設定されておらず、緩衝帯的な空き地の向こうに伐採面を剥き出しにした森林が山すそを覆うように広がっている。森林を切り開いて市街地を建設したばかりの雰囲気が色濃く残っている写真である。続く写真3の撮影時期は不明だが、手前に写っている灯籠状の棟飾りにより、豊原郵便局(初代・1911年竣工)の屋根上から撮影されたものであることがわかる。この建物は1920年に焼失しているため、少なくともそれ以前の豊原市街地を撮影したものである。写真の右手に見えるのが北向きに眺めた大通りである。市街地のメインストリートとはいえ、並んでいるのは簡素な木造平家の建物ばかり。しかも一步裏通りに入れば中心市街地にさえ広々とした空き地が展開していたことがわかる。ただ、奥の方(南3丁目界限)までは高密とは言えないまでも街区は家屋で埋められていたこともわかる。この写真も、初期市街地においては北部の方

から発展を始めていたという証左のひとつと言えそうである。また、遠景中央よりやや左手に伸びる煙突は、豊原乾溜工場のものである。このことと写真中の棟飾形状を考え合わせれば、この初代郵便局が駅前広場や神社通りに面しておらず、北向きに建てられていたことも知ることができる。これは、次節で述べる北部市街地と神社通りの関係性を考える上で重要な示唆である。

1912年、市街地北辺部の重要性は樺太守備隊の撤退により消滅した。守備隊司令部は裁判所に、司令官官舎は博物館に順次転用されていった。また、守備隊宿営地は有事に備えて陸軍用地として確保されることとなった。一方で、守備隊将兵を目標とした商売は立ち行かなくなり、森林資源活用の担い手として期待されていた乾溜工場(1910年操業開始)も捗々しい成果を収めえず、元号が大正と変わった頃の豊原には斜陽の雰囲気は漂っていた。そうした状況の打開は、王子製紙の工場誘致によってなされていくのだが、以降の展開については後の機会にゆだねたい。

## 10 三木論文とモーリス＝スズキ論文

いささか順序が逆になるが、こうした市街地形成過程について、共時的な研究(あるいは植民地研究)ではどのような展開がなされていたのかにも言及しておかなければなるまい。黎明期の豊原に関しては三木理史やテッサ・モーリス＝スズキの研究がよく知られているが<sup>52</sup>、こうして明らかになった初期の豊原市街地の姿は、これらの研究成果とは若干異なる様相を示している。三木論文は最初期の豊原市街地に関して地理学的な分析を試みており、「樺太が空間的位置や歴史的経過、さらには民族、政策、経済においても内国植民地北海道と深い関係にあり、その延長地域として捉えうる可能性を有しながらも、北海道と樺太の間には内地と外地という歴然たる教会が存在していた、ということからも明らか」との認識から<sup>53</sup>、移住型植民地という特性を重視しつつ、「豊原の新市街地は、札幌に準じた基盤目状の区画が測設され、中心軸は鉄道線路に求められ、後にそれを境に官・民施設分離が進んだ」こと、「豊原は内地→北海道→樺太という都市計画技術の流れの末端に位置づけられていた」としている<sup>54</sup>。そして土地区画の点で札幌や北海道の諸都市との共通性を「強く影響されていた」ことを指摘しているが、前述した明治後期の土地制度に関する言及が欠けており、その指摘は推測にとどまっている。

確かに、豊原と札幌は計画的に内陸部に開発された政庁都市であり、方 60 間という基本区画を持ち、小樽や大泊といった港湾都市との連携により本国との連絡が取られている

<sup>52</sup> 三木理史「移住型植民地樺太と豊原の市街地形成」(『人文地理』第 51 巻第 3 号、1999 年)、pp. 221-239、テッサ・モーリス＝スズキ「植民地思想と移民—豊原の眺望から—」(小森陽一ほか『岩波講座 近代日本の文化史 6 拡大するモダニティ 1920-30 年代 2』、岩波書店、2002 年)、pp. 183-214

<sup>53</sup> 三木理史「移住型植民地樺太と豊原の市街地形成」、pp. 2-3

<sup>54</sup> 三木、p. 21

点など共通点が多い。前述した熊谷民政署長官も「札幌を規範にして」と証言しているし、『豊原町勢要覧 昭和四年度』も「都市測定の範を北海道札幌にとり」とうたっている<sup>55</sup>。豊原には「小札幌」という俗称すら存在したようだ。だが三木のいうように、「豊原と札幌のみの類似を強調することは難しい」ことも確かである<sup>56</sup>。とはいうものの、ウラジミロフカへの「遷都」を凶った際に、先行事例というべき北海道と札幌のことは誰の頭にも浮かんでいたに違いない。彼らにとって、その時の札幌は当初から豊原が目指した、あるいは目指さなくてはいけないもの、つまり理念的な目標であったとみるべきではないか。確かなことは、制度的な側面ではその発展形態といえる北海道の後発市街地群の制度を用いたことである。とはいえ、少なくとも土地制度に関して北海道との関連性を重視した三木の言説には同意できる部分が多い。なお、直接豊原には言及していないが、高倉新一郎も『北海道拓殖史』の序文中で、「北海道拓殖史の叙述に当つて私は樺太を除外することは出来なかった。…(中略)…尠くとも南樺太のそれは北海道の拓殖の延長と考へられ我が国の活動に関する限り切り離すことはむづかしく、且つ北海道拓殖の辺境として、尤も端的にかつ露骨にその結果を現実化してあると言ふ点で北海道拓殖の運命の洞察とその批判に欠くべからざるものであり、是を樺太が分離されてしまった現状に即して捨て去ることは出来なかったからである。」とし<sup>57</sup>、結論においても、「北海道・樺太の拓殖は一樺太のそれはその延長と見ることが出来る—我が国に於ける最初の大規模な計画的植民事業であった。」と拓殖活動から見た両地の関連性を強調している<sup>58</sup>。

一方でモーリス＝スズキ論文は、文化史論的な立場から植民都市豊原を対象として「移民経験のもつヨリ(マ)広い含意」を考察している。彼女は「格子状に交差する比較的広い街路に沿って展開する豊原」の市街地を、「最高の近代都市計画の方針を体現し」「植民地権力の重要なシンボルが入念に組みこまれ」たものとし、さらに「台北や京城(現ソウル)といった日本の他の植民地都市に適用された都市計画と大きな共通点があった」こと、「帝国主義的な権力の誇示をもくろむ街路計画と表裏一体をなすもの」としている<sup>59</sup>。後者の例として「鉄道と神社は二つの対照的な神話——国家の神話と植民地主義の神話——を体現するものだった」ことを挙げ、当時神社通りと呼ばれた「駅から樺太神社までまっすぐに伸びる通り」の重要性を強調している。「樺太庁」はもちろんのこと、役所や郵便局を含む主だった政府の建物は神社通り」という軸線上に官公庁施設が集中していたことを、植民地権力や帝国主義的な権力の誇示の論拠として挙げている<sup>60</sup>。

彼女の主張のうち、「最高の近代都市計画の方針」や「台北や京城との共通点」、それに付随した「帝国主義的な権力の誇示をもくろむ街路計画」については、豊原の初期市街地

<sup>55</sup> 豊原町役場『豊原町勢要覧 昭和四年度』(豊原町役場、1929年)、p. 4

<sup>56</sup> 三木、p. 13

<sup>57</sup> 高倉新一郎『北海道拓殖史』(柏葉書院、1946年)、pp. 4-5

<sup>58</sup> 高倉、p. 305

<sup>59</sup> モーリス＝スズキ、pp. 191-192

<sup>60</sup> モーリス＝スズキ、pp. 193-195



において政治的な中心軸は真岡通や大通であり、少なくとも神社通ではなかったことが指摘できるのである。

そうした北側の有利性を最も明瞭に示唆するのは、樺太庁庁舎の向きである。写真4からもわかるように、神社通に面している樺太庁は、実は神社通りに背を向け北側に正面を向けていた。もし、神社通が中心街路であったなら、こんな向きで建てられるはずがない。また、前節で指摘したように、豊原郵便局も元来北向きに、つまりは樺太庁と同じ通りに面して建てられていた。すなわち、初期市街地にとってプライオリティが高かったのは、樺太守備隊施設のある北側(真岡通方面)であり、南側(神社通)ではなかったのである。確かに、後の豊原市街地においてこの通りが重要な軸線となっていたことは確かだが、それは時間的経過や市域の発達に伴うものであり、計画都市上の「植民地権力の誇示」という指摘は事実との懸隔があまりに大きいと思われる。豊原市街地において広幅15間で設定されたのは、基線である真岡通と大通のみであり、神社通は他の通りと同様に10間幅の通りであったことも指摘しておかねばならない。だから、彼女の「権力の誇示をもくろむ街路計画」という表現にふさわしいのは、神社通ではなくむしろ真岡通ではないだろうか。あえて言うならば、神社通という東西の軸線よりも、大通・西一条通といった南北の軸線の方がより重要であったと思われる。ここだけに限らず、彼女の記述には全般的に言って、樺太の植民地性を過剰に意識した部分が目立つ。それは、台湾・朝鮮半島・満洲(中国東北部)といった他地域における植民地研究の成果を樺太において演繹的に適用しすぎた結果、現実と乖離した「帝国主義の幻影」を豊原市街地に粉飾してしまったために他ならない。

ただ、その駅から神社への軸線の意味性は検討を要する課題といえよう。だが、少なくとも、土地制度や市街地に関して言及するならば、比較対象としては他の植民地ではなく北海道の方がはるかに重要であり、彼女の論考においてその視点を欠いていることは致命的な問題と言わざるを得ない。しかしながら、最も問題とすべきなのは、この論考がまかり通る日本の植民地研究の現状にあると思うのだが、これは後の機会に項を譲りたい。

## まとめに代えて

はじめに述べたように、本稿は「なぜ豊原だったのか」という問いの答えとして成立した。それは以下のように要約できる。①ウラジミロフカは日露戦争以前に、コルサコフに次ぐ形での地域拠点の1つとして発達を遂げつつあり、それは日本人の目からも「内陸部の枢区」と映っていたこと、②その当然の帰結として、中央政庁をウラジミロフカに置くという決定に至ったこと、③中央政庁の市街地として建設された豊原新市街地は、北海道の拓殖地区画基準を踏襲した規格により設定されたこと、これは以前の拙稿でも述べたことではあるが、都市史的な意味での重要性を鑑みて、改めて述べておく必要はあると判断した。④初期における豊原市街地の中枢は、設定の基点であった大通と真岡通の交差点一帯の限界であったこと、後に樺太守備隊の撤退や市域の南部への拡大に伴い、政治的な中

心は樺太庁周辺に移っていくものの、それがモーリス＝スズキの言うような「近代最高の都市計画」あるいは「帝国主義的な権威の誇示をもくろむ街路計画」の産物でなかったことは確かである。⑤以上の点を判断して、初期の「豊原」がすでにその名に恥じない地域的拠点であったこともここで強調しておきたい。確かに、「豊原」はある程度将来的な願望を含んだ命名であったかもしれないが、同時に、当時のウラジミロフカをとりまく状況を全く考慮に入れないものでもなかった。むしろ、命名者たちの見識はその後の発展と現状が証明していると言ってもいいだろう。

また本稿が示唆するものは、研究アプローチとしての通時的視座の重要性である。初めに言及したように、現在の日本期研究はおもに共時的視座に基づき海外植民地の一つとして研究がなされているが、本稿で取り上げた課題のように、同時代的な比較検証だけでは解決し得ない課題も多いだろう。とくに近世以降のサハリンは時間的にも空間的にも様々な「境界」が混在した地域であるために、その複雑さがもつ歴史の輪郭は通時性と周辺地域を念頭に置かなければ見えてこないだろう。今後サハリンの歴史研究が進捗するにつれ、帝政ロシア期および日ソ交替期・ソ連期との連続性と同時に、周辺地域との関連性、とりわけロシア極東地域や北海道との関わりが必然的に重要な意味を持つようになることは疑いない。したがって、こうした側面における研究アプローチの構築も、今後の大きな研究課題といえるだろう。

最後に、本稿の結びにあたり、単に才筆という表現では語りえないチェーホフの慧眼と筆力へ改めて賛嘆の念を抱いたことを告白しておく。すなわち、彼はまず「寒村」のウラジミロフカのイメージを強く、かつ緻密に印象づけることで、私たちからその後のウラジミロフカの姿を包み隠してしまったが、にもかかわらず、その同じ一節の中でウラジミロフカという地が持つポテンシャル——いわば「豊原」の可能性を暗示してのけているのである。その意味では、豊原という名は——その命名者がチェーホフのこの名句を知っていたか否かはともかく——あるいはチェーホフへのオマージュとして存在したのかもしれない。そして、それはユジノーサハリンスクの歴史の中で最も文学的なエートスの1つとして記憶されるべきことのように思えるのである。

## 謝辞

本稿作成にあたり、とくに防衛庁防衛研究所図書館・外務省外交史料館・北海道立図書館から文献資料の提供を受けました。また、原暉之・荒井信雄・松井憲明・山崎秀樹・池田裕子・田村将人の各氏に資料提供・アドバイスをいただきました。末尾ながらここに記し、改めてお礼を申し上げます。

## 引用文献一覧(発行年順)

### A. 外国語文献

- С. Гальцев-Безюк. Топонимический словарь Сахалинской области. Южно-Сахалинск, 1992.
- А. И. Костанов. Владимировка-селение на черной речке из истории Южно-Сахалинска. // Краеведческий бюллетень. 1993. № 4. Южно-Сахалинск.
- А. П. Чехов. Остров Сахалин (из путевых записок). Южно-Сахалинск, 1995
- М. С. Высоков и др. *История Сахалинской области с древнейших времен до наших дней*. Южно-Сахалинск, 1995
- А. Т. Кузин. Южно-Сахалинск: с вершины века. Южно-Сахалинск, 1996
- А. И. Костанов. Топонимика Южно-Сахалинска // Краеведческий бюллетень. 1996. № 2.
- А. И. Костанов, В. В. Семенчик. Южно-Сахалинск: три цвета времени. Владивосток, 2002.

### B. 公刊書

- 東亞同文會編纂局編・鈴木陽之助校『樺太及北沿海州』(東亞同文會、1905)
- 長谷場純孝『樺太紀行』(民友社、1907)
- 坂本泰助『樺太之豊原』(樺太著名町村史刊行会[私家版]、1922)
- 豊原町役場『豊原町勢要覧 昭和四年度』(豊原町役場、1929)
- 葛西猛千代『樺太土人研究資料』(私家版・北海道大学附属図書館北方資料室所蔵)
- 高倉新一郎『北海道拓殖史』(柏葉書院、1946)
- チェーホフ・中村融訳『サハリン島(上)』(岩波文庫、1953)
- 柳田國男『定本柳田國男集 第二卷』(筑摩書房、1968)
- 松浦武(竹)四郎・高倉新一郎解題『竹四郎廻浦日記(上)』(北海道出版企画センター、1978)
- 葛西猛千代・西鶴定嘉・菱沼右一『樺太の地名(復刻)』(第一書房、1982、原本は樺太郷土会発行、1930)
- 陸軍省『明治三七八年戦役陸軍政史』第八卷(復刻版、湘南堂書店、1983)
- 松村正義『日露戦争と金子堅太郎 広報外交の研究』(新有堂、1987)
- 大江志乃夫『兵士たちの日露戦争 五〇〇通の軍事郵便から』(朝日選書、1988)
- 西村いわお『南樺太 概要・地名解・史実』(高速出版、1994)
- ヴィソコフ他著・板橋政樹訳『サハリンの歴史』(日本ユーラシア協会北海道連合会、2000)

### C. 公文書・新聞記事

- 「南樺太巡遊記(八) 小西海南」『東京朝日新聞』1905.11.17.
- 「日露戦役ニ依ル占領地施政一件 樺太ノ部」(鈴木陽之助ほか、1906.10)、外務省外交史料館所蔵
- 「樺太守備隊施設ニ関スル意見進達(満密受第 179 号)」(守備隊司令官山田保永少将、1906.4.14) 防衛庁防衛研究所図書館所蔵
- 「豊原案内記」、北日本新聞、1911.8.23

「お役所は土人小屋 三畳間の長官殿」『小樽新聞』1936.8.24.

「豊原警察署東四条巡査派出所 勤務細則」、サハリン州公文書館(Г А С О: Ф. 1-И с, о п. 1, д. 143)

#### D. 研究論文

岩田房次郎「南部樺太所見」(『建築雑誌』第 219 号、1906.1)

上田陽三「北海道農村地域における生活圏域の形成・構造・変動に関する研究」(北海道大学学位論文、1991)

越野武「アメリカ建築の移植」(『建築雑誌』第 1384 号、1996.2)

井潤裕「南サハリンにおける日本統治初期(1905-1915 年)の建設活動と営繕組織」(北海道大学修士論文、1997)

三木理史「移住型植民地樺太と豊原の市街地形成」(『人文地理』第 51 巻第 3 号、1999.6)

井潤裕「日本期南サハリンにおける建設活動に関する研究」(北海道大学学位論文、2000.3)

テッサ・モーリス＝スズキ「植民地思想と移民 豊原の眺望から」(小森陽一ほか『岩波講座 近代日本の文化史 6 拡大するモダニティ 1920-30 年代 2』、岩波書店、2002)

坪井秀人「棄却されしものたち」(小森陽一・成田龍一編著『日露戦争スタディーズ』、紀伊国屋書店、2004)